

---

# 遠い過去の記憶

KENKEN

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

遠い過去の記憶

### 【Nコード】

N5244A

### 【作者名】

KENKEN

### 【あらすじ】

幼いころのばあちゃんの記憶。両親から聞かされるばあちゃんの記憶。その時二人の間に何が起ったのか？

（前書き）

あなたは赤ちゃん子ですか？そうでなければわかりにくいかもしれません。少しでも共感できたら幸いです

「もうすぐ迎えが来るわ。」

ばあちゃんがいった。

病床でひとまわり小さくなったばあちゃん。

私はその時6歳：この時の言葉は19歳の今でも忘れず覚えている。

両親が共働きだったこともあり一人っこだった私の面倒を4歳までずっと見てくれた。昔はちゃんちゃだったらしく仕事から帰ってこない両親を泣きながらばあちゃんと一緒に待っていたと母親はいった。嫌な顔せず私の側にいてくれたお陰で私は幼いながらも人思いな人間になれたと思っていた。ある日保育園の親子参観があつた。

以前にも触れたのだが両親は共働きだったのでばあちゃん家が親子参観にきてくれた。

腰に手をあてゆっくりと歩いてくる。私は我慢できずばあちゃんに走り寄る…

その日の参観で私の家以外母親が父親が参観に来ていた。そうだ今日は日曜日なのだ、しかし両親は仕事が忙しかった為にばあちゃんがきてくれたのである。

話はそれたが本題へ移ろう。

その日の授業は竹馬作りであつた。察しの通り老婆が制作できる代物ではない…

ばあちゃんは顔を曇らせ先生に何かいつている。

先生が寄ってきて「じゃあおばあさんと先生と一緒に作りましょうね」

といわれた。

幼かった私には全く理解ができない展開であつたろう。いや訳を説

明しなかった保育士にだって説明する義務があると思うのだがその時の空気は大体私にも伝わっていたのかもしれないと昔を振り返った。

次にわかっていたかのような事が起こった。ほとんどが先生によって作られたのである。

あの時はあちゃんじゃなくて父親か母親がきてくれていればあんな惨めでどこかにいきたい感覚はうまれなかったであろう…本当にどう表現すればよいのがわからないこの感覚は私の目から涙を流した。

あの時はあちゃんの気持ちになれなかった。

ばあちゃんには私の気持ちは痛いほどわかっただろう…でも体は無理をできない。

苦汁の決断だったんだろう…。

無事竹馬制作が終わりばあちゃんと一緒に家に帰宅することになった…

その時の家は保育園から約10分のところにあっただからやり切れない気持ちの私は最後の信号を渡るとばあちゃんを置いて走ったのである。保育園から一言も言葉をかわすことなく私は走った。

後ろからばあちゃんが私の名前を呼んでいた。

「ばあちゃんなんて嫌いだ」

私は今日の嫌な気持ちをばあちゃんにぶつけた

私が玄関の前に座っていると遅れてばあちゃんが歩いてきた。

「ばあちゃんでごめんな」

ばあちゃんはいった。

「なんでばあちゃんがきたの？なんでお母さんじゃないの？」

今でもいったことを覚えてる。悪い足をひきズリながらばあちゃんはやっこの思いで保育園を往復した。

なのに何も知らない私はばあちゃんにあんなことをいつてしまった。

「ごめんね。ばあちゃんでごめんね」  
なく私を撫でながらばあちゃんはいった。

ばあちゃんも泣いてた。

なんて謝ればいいんだろ？ばあちゃんは何をしてもずっと私の味方だったのに。行きたいところだって言えば連れてってくれた…  
足が悪いのに落ち着きのない私の歩幅に合わせてくれた。

なのに。

19歳の時母親から教えてもらった紛れも無い事実を胸を引き裂かれた。

思いだせば涙がでてる。ときどき物置に置いてあるあの時の竹馬をだしてみる…なんて軽いんだ。私の胸くらいしかない竹馬…片手で持ち上げることが出来るほど細く軽い竹の棒に先生と一緒に作っていたばあちゃん。どんだけ辛かったんだか今わかった…

あの日6歳の時に聞いたことはあの何十年たったらわかるのだろう…。

あと何年たてば許されるのだろう。

笑ってたばあちゃん  
泣いてたばあちゃん

全部のばあちゃんが好きだった。  
いやっこれからもずっとばあちゃんは忘れない。

ありがとね

この物語はフィクションです。

（後書き）

最後までありがとうございました。もういないばあちゃんは何を自分  
分に問い掛けたかったんだろう？もし今はあちゃんと話ができたら  
なんていうだろう。眠れなくなってしまう（笑）



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5244a/>

---

遠い過去の記憶

2010年10月11日02時52分発行